

阪神・淡路大震災 16 年後における震災遺児への心理的影響とその位置づけ —改定出来事インパクト尺度と半構造化面接による報告—

倉西宏¹、八木俊介²

(¹京都文教大学心理臨床センター、²あしなが育英会)

<要 旨>

本研究は阪神淡路大震災 16 年後における震災で親を亡くした子どもの心理的影響と震災体験や死別体験をどのように遺児自身の中で捉えているのかについて検討を行ったものである。調査は遺児 195 人とその養育者 92 人に IES-R を郵送により送付し、遺児が 44 人、養育者が 38 人から回答を得られた。さらにインタビューに協力可能であると回答した遺児 18 名に対して半構造化面接を行いその語りの検討を行った。結果から震災遺児の IES-R では平均は 12.5 (SD=15.5)、カットオフ値である 25 点以上は 7 名 (16%) で、養育者の平均値は 21.0 (SD=15.5) で 25 点以上は 16 名 (42.1%) であった。さらに筆者らの震災後 12 年後における調査から継続して協力してくださった遺児と養育者の結果の比較ではそれぞれ有意に値が低下していることが見られた。

遺児へのインタビューでは①両価的影響と震災の意味②「震災遺児」というアイデンティティとその揺らぎ③伝える責務とメディアへの感情④あしなが育英会・レインボーハウスの重要性⑤年月の経過に伴う問題の変化等の点について考察された。震災と死別体験を経ることで成長と共に震災を自己の一部として取り入れていることが見られたが、それだけでなく震災後 16 年を経ても遺児達は震災と向き合い続け、さらに成長と共に問題の質が変化しており、それらのプロセスに継続的に援助を続ける支援団体の存在が重要であることが考えられた。

<キーワード>

阪神淡路大震災、震災遺児、死別、体験の主体化、IES-R

【はじめに】

1995 年の阪神・淡路大震災は未曾有の大災害として多くの死者と共に遺族を生み出した。中には親を亡くす子どもたちも多く存在し、あしなが育英会では、その震災で親を亡くした遺児（震災遺児）を 573 人探し出し、これまで金銭的な進学支援と心のケアを行ってきた。神戸にある震災遺児の心のケア施設レインボーハウスは、震災から 16 年を経て多くの子どもが成人となり、現在は死因を問わず、遺児全般の心のケアの施設として活動を続けている。震災遺児にとって年月の積み重ねは、一つの成長を表すものであろうが、心的体験としての震災体験はどのように月日を重ねているのだろうか。

当時から震災遺児は突然の大地震により親や家族を亡くすと共に震災遺児自身も被災体験をしたことから PTSD 症状と考えられる訴えが多く見られていた。筆者らは 2007 年に震災 12 年後の経過として震災遺児とその養育者に対して改定出来事インパクト尺度 (Impact of Events Scale Revise: 以下 IES-R と略記) を実施した (八木・倉西 2010)。IES-R とは Horowitz ら (1979) による Impact of Events Scale (IES) に Weiss (1997) らが過覚醒症状の項目を加えたもので、Asukai, N 他 (2002) によって日本語版に翻訳し標準化されたものである。質問項目は PTSD の 3 症状 (再体験、回避、過覚醒) について尋ねるもので「全くなし」から「非常に」までの 5 段

階から選択するものである。スクリーニング目的では 25 点がカットオフ値とされている (Asukai, N 他 2002)。結果において、遺児 72 人の IES-R 得点の平均は 17.3 点でカットオフ値である 25 点以上が 25% (18 人)であった。養育者 37 人の平均は 22.1 点で、25 点以上が 37. % (14 人)であった。IES-R だけでは PTSD の判定はできないが、震災から 12 年経っても PTSD 症状の存在が高い割合で示され、PTSD のハイリスク群が未だに存在していることが示された。

そこから 4 年を経た震災 16 年後の段階において、それらがどのように変化したのか、さらに 16 年を経た段階で震災遺児が震災や親との死別体験を主観的にどのように捉えているのかについて事例的に示したい。そしてそこから震災の長期的影響や現状を理解すると共に今後の援助の必要性についても検討を行いたい。

【方法】

1. 調査協力者

阪神・淡路大震災の後に、あしなが育英会に関わってこられた震災遺児とその養育者の方々。震災遺児は震災当時 18 歳未満であった子どもに加えて、22 歳未満の大学生・専門学校生を含む。震災から 16 年を経ているため、現在は成人になっている者も多く含まれている。養育者は震災後、生き残った震災遺児の父や母、養育した祖父母や親戚等である。

2. 調査方法

震災遺児家庭に IES-R とインタビュー調査への協力をお願いに関する文章を郵送にて送付し、遺児・養育者それぞれ本人に記入してもらい郵送によって回収を行った。

インタビューの了承を得られた遺児に対して、筆者らから連絡を行い面接調査を行った。インタビューでは協力者の成育歴などを聴きながら、震災や親との死別体験について話してもらった。主な質問項目は表 1 参照。インタビューの場所は、ほとんどをあしなが育英

会の相談室で行い、数例のみ協力者の居住地の会議室、比較的静かな喫茶店等で行った。調査期間は、質問紙を 2010 年 11 月から 2011 年 1 月に送付・回収を行い、面接調査を 2011 年 1 月から 3 月に行った。面接調査は著者 2 人で分担して行った。分析は震災遺児の語りの中から共通する特徴を抽出し、それらに考察を加えた。結果においてはその代表例を事例的に提示した。

表 1 質問内容

成育歴, 家族構成, 家族との関係等
震災体験
死別体験
震災前後での変化
震災体験・死別体験の位置付けとその変化

* これらの内容を随時深めるよう
質問を行い語りを促した

3. 倫理的配慮

調査協力者に対して研究のための調査であることを文章に記載した上で質問紙とインタビューの協力者を募った。さらに調査面接を始める際には再度インタビューは研究のために用いられること、データの取り扱いやプライバシーの保護などに関して説明を行い、了承の上で面接を始めた。また、本人の承諾を得た上で録音し、後日逐語記録を作成した。面接では語られた内容を真摯に受け止めるよう心掛け、話したくないことは話さなくても良いこと、何かあれば途中で終わることができるとを伝えた。最終的には全員が中断することなく語られ、質問以外の体験や出来事も自ら話していられる場面が見られた。また、面接の質問内容が終了後に、面接で話した体験が苦痛となっていないか等を伺い、本研究の面接調査の体験や感想も話してもらい落ち着くのを待った後に面接を終えるようにした。

【結果】

1. 調査協力者

質問紙は 12 年後の段階で行った協力者と同一対象である遺児 195 人、養育者 92 人に

表2 インタビュー協力者

協力者	性別	年齢	震災での死別対象
A	F	23	母、兄
B	F	19	父
C	F	19	父
D	F	27	母
E	F	20	母
F	F	19	父
G	F	37	母
H	F	17	父
I	M	17	母、兄
J	M	19	父
K	M	23	父
L	M	28	父
M	M	19	母
N	M	26	父
O	M	23	父
P	M	24	父
Q	M	25	父、母
R	M	17	父

送付し、分析有効回答数は遺児が 44 人 (22.6%)、養育者が 38 人 (41.3%) であった。遺児の内訳は男性が 21 人、女性が 23 人で平均年齢は 23.7 歳であった (内 29 人 (65.9%) が 20 歳以上)。養育者は男性が 12 人、女性が 26 人で平均年齢は 59.0 歳であった。また、12 年後の段階から引き続き協力してくれた協力者は遺児が 35 人、養育者は 20 人であった。

インタビューに協力しても良いと答えた遺児は 19 名で、「不明」とした協力者が 3 名であった。その合計 22 名の中から、筆者らが調査可能な居住地域に住み、かつ日程の調整が可能であった 18 人 (男性 10 人、女性 8 人) にインタビューを行った (表 2)。面接調査の時間は 1 時間～3 時間であった。

2. IES-R

遺児における得点の平均は 12.5 (SD=15.5) (12 年後: 17.3 点 (SD=16.1)) で、カットオフ値の 25 点以上は 7 名 (15.9%) (12 年後: 18 人 (25.0%)) であった。養育者における得点の平均は 21.0 (SD=15.5) (12 年後: 22.1 点 (SD=17.0)) で、25 点以上は 16 名 (42.1%)

(12 年後: 14 人 (37.8%)) であった (表 3、4)。震災 12 年後の時点から引き続き協力して下さった方のみでは、遺児の平均点は 12.6 (SD=16.4) (12 年後: 16.3 (SD=17.8)) で、25 点以上は 6 名 (17.1%) (12 年後: 7 名) で、養育者の平均点は 16.2 (SD=11.7) (12 年後: 20.2 (SD=13.8)) で 25 点以上は 7 名 (35%) (12 年後: 7 名) であった。継続協力者の 12 年後と 16 年後の比較を行うと、遺児は有意に低下し (t 検定: $p < 0.01$)、養育者も有意に低下する (t 検定: $p < 0.05$) という結果が認められた (表 5)。

3. インタビュー事例

ここでは代表例となる事例を提示したい。

「 」は協力者が語った言葉である。

【事例 1】A さん、23 歳、女性。看護大学生。小学校 1 年の冬に震災が起こり、母と兄が亡くなる。母は助け出された時は意識もあったのだが、病院に搬送される途中に亡くなってしまう。

【母、兄との死別体験とその移り変わり】母の死に直面した時は、動揺は無かったが、葬儀の際に「すごい泣きました」。「いくらじっと見てもちらっとも動かない」「死んだってこういうことなんか」と実感したという。ただ、その後は父が生活をカバーしてくれたおかげで、他の家庭ともあまり変わらないとまで思っており、母のことで寂しいと思うことも無かったのだという。

高校卒業の前に A さんは自分の母子手帳を見つけた。そこには「あたしのこと書いてあったんです、お母さんの字で。お母さんが自分のことをこういう風にかけてくれているのが嬉しくて」と、母親の存在が前面に現れて来るようになってきた。さらに大学進学後は助産師の実習等を通して、出産や結婚について考えることが増えていった。母がいないことが、出産の際にすごく寂しくなりそうだと想像するようになる。さらに「最近になって

表3 IES-R 結果①

	遺 児 (n=44)			養 育 者 (n=38)		
	最小値	最大値	平均値 (標準偏差)	最小値	最大値	平均値 (標準偏差)
IES-R 合計	0	79	12.5 (15.5)	0	66	21.0 (16.0)
男性	0	35	10.6 (9.5)	0	40	16.0 (13.0)
女性	0	79	14.4 (19.6)	0	66	24.0 (16.0)
IES-R 侵入	0	28	3.8 (5.8)	0	26	8.2 (6.5)
IES-R 回避	0	31	5.6 (7.0)	0	21	8.2 (6.1)
IES-R 過覚醒	0	20	3.0 (4.0)	0	19	5.0 (5.1)

表4 IES-R 結果②
25点以上

	遺児 人数 (%)	養育者 人数 (%)
全体	7 (15.9)	16 (42.1)
男性	5 (20.8)	4 (33.3)
女性	2 (10.0)	12 (46.2)

表5 継続協力者における震災12年後と16年後の
IES-R 平均値の比較

	12年後		16年後		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
遺児 (n=35)	16.3	17.8	12.6	16.4	2.454*
養育者 (n=20)	20.2	13.8	16.2	11.7	1.886**

** p<.05 * p<.01

すごいお母さんと話したい」と思いが募り、「結婚とか子ども生むとか、大人の女性に近づくとつれてモデルにしたい」と思うようになる。そのため「小さい頃よりも、いないことが寂しいなって思うようになってきました」。「どういう思いで生んでくれたんやろうとか。自分が生まれた時どうやったかを知りたい。自分がこれから生む時になって、お母さんを見本にしたいっていうのが強くなっている。それは小さい時から変わっていった部分です」。そのため「パートナーのお母さんとすごく仲良くなりた。ぽっかり空いているところがそこで埋まらないかな」と思うようになった。こういった自分の体験から「心のケアって長期に必要って、前はなんでやろうって思ったけど、お母さんへの気持ちが変わった時、だからかって。人の気持ちって変化するんや」と実感したのだという。

兄との死別については多く語られなかった

が、ただ、兄が死に天国で母と一緒にいるんだろうな、という思いを持っているということであった。

大学生になってから、あしなが育英会の震災遺児のつどいで、結婚した震災遺児の先輩がその子どもを連れてきたことがあった。これまでは「家族って減るしかない」と思っていた。しかしその先輩の姿を見て「結婚して増える」こともあり「家族って形を変えるっていうのが当たり前のことなんだ」と思ったのだという。現在震災体験と死別体験は「それがあること寂しいってことでも、ステップアップするチャンスというか。助産師になる時、この経験が役立つこともあるだろうし、自分のこれから困った時に、これがあつたから進めるってこともあるかもしれない」と思えるようになってきている。ただ、「起きたことは変えられないって感覚あります。地震が無かつたらっていう風には思わない。でも母に会

えない状況は整理されていない」とまだその途上であることを言葉にしてくれた。

【事例 2】D さん、女性、27 歳、主婦。結婚し 1 児の母。震災によって母を亡くす。なくなった直後は「理解はできてなかったような気が」していた。「嫌なことは忘れよう」という性格だったのだが「お母さん亡くなったことは、忘れてはいけないっていうか。お母さんの存在は、家族が亡くなったっていうのはちゃんと心に残しておかないと。お母さんが心の中におるねん。でもつらかったっていう出来事という意味では思い出したくないっていう」葛藤があったという。さらに「自分だけじゃないっていうのがあるし。あしながで色んな人とも知り合って。同じ境遇の人がいっぱいいると、ちゃんとがんばらないといかん」と思っていたという。

【母の希求】しかし子どもを妊娠してから、お母さんに色々聞きたいことや頼りたいことも出てくるようになった。「実家に帰って、甘えたり、時々子育てにイライラしてしまったりとか、お母さんに打ち明けられたら気が楽なんやろうなって。お姉ちゃんとも話すけど、言えない部分があるので。親には甘える部分が違うのかなって。子育てをする際も『あたしをこういう風に育ててたんや』ということ聞きながらできたらいいのに、と思うことがある。母には「結婚した報告とか、子どもができたこととかも。『ほらほら、この子やで』、とか。『見ててよ』みたいな。『うちもお母さんになったで、見守っててなって』って話しかけるんです」。もし「お母さんがいたら」と仮定し「16 年経ったんで、自分が成長しているのかどうか聞きたい」と思いを募らせるようになっているのだという。

【事例 3】E さん、女性、20 歳、大学生。4 歳の時震災に遭い、母を亡くす。

【言語化することへの難しさ】当時から寂しいという思いはあったが当時のことはあまり覚えていないと話される。インタビューに

も快諾してくれたが、「言葉にするのが難しい。思っているけど、口に出しては言いにくい」と話し、「わからない」と返すことも多かった。

当時の震災体験は「意識できてなかったし、理解できてなかった」。母の死も被災後親戚の家に避難した際に知ったが、「亡くなったっていうことを理解できてないっていうか。わかってなかった」という。ただ、「大きくなるにつれて人とは違うねんな」という思いが生まれるようになる。しかしその後も家族で震災の話題が出ることはあったが、あまり自ら考えることは少なかった。

【メディアへの怒り-震災遺児としての責務】母の死については「そこまで知りたいなって思ってなかった」が、メディアからの取材の際に取材者がこれまで知らなかった母の最終的な死因を聞いて教えるよう「しつこく」言ってきた。嫌々ながら父に聞き知ることとなったのだが「そこまで…なんでそこまで言わなあかんのかなって思った」「お母さんの死因とか、言う必要あるのかなって」。この他の取材者の中でも「自分ではわかっているつもりなんかもしれんけど、こっちからしたら、あんま知らん」「何もわかってない」と思ってしまう人も多かったという。「悲しくないんですか、泣いたりしますか」等と尋ねられたときは「ふざけるな」という思いになったこともあるという。「聞きたくないことを聞いてくる」ことも多く「知らんって言ったこと、わからんって言ったことはそのままに置いてほしい」と強く話された。

ただ、それでも取材の依頼があれば「極力引き受けようと思っている」のだという。それは「やっぱ伝えなあかんっていうのは思っていたから、震災のことを。忘れてほしくないって思っているから」と強く言葉にされた。

【事例 4】K さん、男性、23 歳、大学 4 年。

7 歳の頃震災に遭う。震災直後、父は無事で元気だったが全壊したマンション再建の理

事を勤めながら、被災後の生活と仕事等の多忙な日々を続け、震災後3ヶ月後に心筋梗塞で亡くなってしまった。震災による「関連死」とされているのだが「俺ら家族は少なくとも震災が親父を殺したと思っている」のだという。病院で父の死を前にして周りが泣いて悲しんでいる中、Kさんは「何が起きたんだろうって感じで」「よくわかっていなかった」。しかし葬儀の際、「固くなったもう全く動かないその表情を見て、何か悟る前に涙が勝手に出てきて。たぶんその時に本能的にわかったんかなって。後から振り返るとそうだったのかなって。その時に死ぬってどういうことかわかった」のだという。

【あしなが育英会との出会い】その後小学校では震災や死別の影響を「引きずる」ことがあり、「情緒不安定」な時期が続いた。しかしあしなが育英会の震災遺児のつどい等に参加するようになり「発散することを覚えて」「変わるきっかけになった」という。そしてレインボーハウスという震災遺児の心のケア施設ができてからは、連日通うようになり「第二の家」になっていったという。そこでの友人は学校の友人よりも「重要なもの」で、今から振り返ると震災遺児のつどいは「人を受け入れたりとか、自分の今までを受け入れて。で、明日を生きる活力じゃないですけど、を得ようとしていたのかな」と語られた。

【震災後を生き抜く意味、震災の意味】さらに大学生になると「前に進もう」と思うようになり「少しでも人のために生きていこう」とも思うようになる。それは「頑張ってる生き抜くことが、亡くなっていく人のせめてもの恩返しっていうか、供養」と思い、さらに「親父が亡くなったからこそ、このあしながに出会ったし。そこの経験がまた今の自分にすごい浸透しているので。自分がサービス業に進みたいって思ったのも。やっぱり親父が死んで、あしながに出会って支えてもらって。今度は自分がお返しをする番だって。人を支え

ることが自分の喜びだって位置づけている」。現在は「震災が無かったらっていうのが自分の中では信じられない、考えられない事象」で「悲しいとはもう思ってないです。もうそうなることだった。そうなる運命じゃないですけど、巡りあわせだったのかな」とまで思え「親父の死とか抜きにして、震災が家族の大切さ、人の大切さっていうのを教えてくれた」と実感している。「失ったけど、得るものは得たし。これからその恩返しをどんどんしていくのが、社会人の僕の使命なのかなって。今までは全部与えてもらっていたので。生かされてきたものなので」。

【事例5】Lさん、男性、28歳、社会人。結婚し2児をもうけている。小学校6年の冬に震災に遭い、その二日後に父が突然倒れ、その翌朝亡くなった。原因は不明だったが震災の「関連死」とされている。

【震災のストーリーの変容】「震災が無かったらお父さんは死んでないなって思ってたんです。ただ、震災で親を亡くすイメージって、家が倒壊して生き埋めになって自分自身も生き埋めになって父親母親が死んでたってというのがイメージじゃないですか。僕の父親は違って、家も無事で助かったという中で、同じ震災で親を亡くしたっていうのは言えるのかなっていうのは最近まで思っていた」。そのため「それを無理やり震災でって言ってたところに自分の中でわだかまりっていうのがあって」悩んでいたという。しかしこのインタビューの少し前に複数の被災者の方々に会い震災の話聞いていく機会があった。「色んな人の話を聞いてくたびに、色んな人のストーリーがあることに気付く。すると「それぞれの震災はそれぞれで決めていい」と思うようになり、「震災って何やろうっていうのは一つのこれっていうものではなくて、自分自身の中で感じるものであったりとか、自分自身の中で決めていくもの」と思うようになる。「17日にお父さんと一緒に過ごして、18日過ごし

て、19日に亡くなったっていうのが僕のお父さんの中での自分のストーリー」。だから「今はどっちでもいい」、「お父さんと震災に関しては、僕の好きなように思ったらいいかな」と思うようになったのだという。

【震災と自己】「そこ（震災）が無ければ今の自分もおらへん」と思っている。「お父さんだけ亡くなって。震災が無かったら別の人生だったやろうし。震災だけ経験してお父さん生きてても全く別の人生になったと思うし。その二つのことがあったから、今の自分がいるっていうもんやと思うから」。震災と父との死別によって「今、僕がいる、今の僕がいる大きな位置づけにはなる」と思っている。

【事例6】Oさん、男性、23歳、社会人。小学校1年の冬に震災に遭い、父を亡くす。「父親がいないので母親に聞いたら天国行っちゃったと言うし。事実受け入れるまでがしんどかった」と震災直後は嘔吐や発熱等の身体症状も現れていた。父の遺体を初めて見た時は「受け入れられなかった」が、その後親戚が遺体を見に行く際に何度もついていき、二回目以降は何度も激しく泣き、死を実感したのだという。震災は「つらかった」体験であり、今思っても「二度と体験したくない」「人生を変えた出来事」だと捉えている。

【メディアへのネガティブな思い】震災後メディアの取材が来たのだが、自分は嫌で拒否をしたことがあった。しかし拒否をしたのに、こっそり遠くから撮影していることに気づいた。そのことへの怒りとメディアへの嫌悪感を未だに持っているのだという。

【父親がいないこと―枷として】父親がいないことは「枷」であると話す。もし自分が学生のころに不登校になっていたり、今も仕事を辞めたりしたら「父親がいないからメンタル面弱い」と思われるかもしれないし「変な生き方できない」。「枷って言い方はひどいけど、父親がいないからこそ強く辞めずに頑張っていけないと、ってのもある。そういう

風に世間に思われたら他の遺児も同じように思われる」と意識して生きている。

震災後あしなが育英会と出会い、つどいなどの遺児同士の交流の場に参加するようになる。そこでのたくさんの出会いはとても大きなものとなっており「父親を喪ったことはそれと引き換えなんかなってずっと思っていた」。しかしある時学生ボランティアの人から、出会った遺児の仲間は「父親がくれたプレゼント」ではないかと言われ、「そう思うと気が楽になった」。「父親がくれたつながりはこれからも大事にしていけない」と思っている。

【事例7】Rさん、男性、17歳、高校2年。1歳の頃に震災に遭い、父を亡くす。震災後は仮設住宅で小学校入学前まで暮らし、その後市営住宅に移り今に至る。中学・高校と生徒会活動で活躍し、音楽のバンド活動等も行い充実した生活が送れている。将来は「人を助けたり人を変えていく」仕事に就きたいという。

【震災の実感】震災当時は1歳で「記憶は全くない」。そのため「僕が震災を身近に感じるの、やっぱり人から聞いた話」なのだという。「父親がおらへんっていう実感はあったんですけど、父親がおらへんのが当たり前」で「友達の家に行くと、なんで父親がおるんやろう」と思っていた。しかしRさんが小学6年の1月17日に父の友達がRさんに会いたいと申し出てきたため、2人で食事をする事となった。するとその人が「ボロボロ泣いて」。Rさんは「父親ってものがよくわかんないんです。そのわかんない存在にそこまで泣く人がいるっていうのは、それだけの人、そういう父親やったんやなって。それで父親の存在と、震災で失ったものの大きさ」を知ったのだという。そして「その時に初めて俺にも父親がおったんやっていう実感が出た」のだという。そこから震災を意識するようになり、どんどん「震災とお父さんが近づいてきた」のだという。Rさんにとって1月17日は

「普通は1月1日が年の始めなんですけど、僕にとっては1月17日が年の始まり」であり1つの「節目」なのだという。1月17日には墓参りをして1年のことを報告する。自分で1年を「再確認」とすると同時に「知らない父親にも報告する」のだという。

【『震災遺児』という位置づけ】震災については「知っておかないといけない、忘れてはいけない、震災遺児と呼ばれる限りはそうではないといけないって思っている」。ただ、震災のことを人に話すのが嫌で、話して「震災遺児の僕っていう風にみられる」「そういう雰囲気嫌」なのだという。震災は「身近に感じることはあるんですけど、実感はない」と語り、震災は「震災遺児としての僕の中心なんですけど。ただの僕としては中心ではない」のだという。「人から見ての僕」と「僕から見ての僕」との間に違いがあり、「震災っていうのは大きいんですけど、僕の大切な、重要なものなんですけど。それが根本にあって僕が成立しているわけじゃない」と捉えている。ただ、「中心じゃないのは確かなんですけど、どこに位置づけられているかっていうと難しい」と語り、震災を自分自身の中でどう捉えていくのかは今そのプロセスの最中であるようであった。

【考察】

1. IES-R

兵庫県長寿社会研究機構こころのケア研究所(2001)は1995年1月17日の阪神淡路大震災から約5年半経過した時点で、大きな被害を受けた地域を校区に持つ高校の2年生を対象にして、震災によるPTSDを中心とした心理的状态について調査した。本調査と同じようにIES-Rを用いており、有効回答数の中では100人中25点以上が3人(3.0%)であった。そこから10年を経た筆者らの結果と比較すると、大幅に上回っていることがわかる。しかし震災後15年の段階での宮井・内海・大

和田・加藤(2010)が複雑性悲嘆等の複数の尺度から震災遺族の精神健康について報告しているが、そこでのIES-Rは54.1%が25点以上を示し、PTSDのハイリスク者が未だ多く存在していることが示されている。それらと比較すると、筆者らの行った調査の協力者はカットオフ値を越える者は少ないと言えるだろう。これは、筆者らが行った調査の遺児・遺族はあしなが育英会の援助を受けてこられた方々であり、これまでの援助活動がPTSDのリスクを軽減させることにも繋がっていたことが考えられる。兵庫県が行った震災遺児への調査(兵庫県・神戸市2011)からも、遺児にとってあしなが育英会の援助が大きな役割を果たしていたことが見出されている。

震災12年後からの継続協力者における比較では、遺児と保護者共に25点以上の人数にはほぼ変化が無いものの平均点はそれぞれ有意に低下した結果が示されている。つまり16年を経た段階においても、年月によってまだまだ変化し得るものであることが考えられ、長い年月を以って援助を続けて行くことが重要であることが示唆されるのである。

2. インタビューから

①両価的影響と震災の意味

震災による親の死といったネガティブな影響は、遺児にとって極めて大きな体験であるため、Kさんのように子どもを情緒不安定にさせ、Oさんのように「つらかった」体験として「二度と体験したくない」「人生を変えた出来事」と捉えるようになり、その大きすぎる体験はEさんのように言語化を難しくさせてしまうことがある。しかしそれだけでなく、Kさんのように家族や人の大切さを知り「失ったけど得るものは得た」と両価的な影響を受けていることが見出された。さらにそれらの体験の中で肯定的な意味を見出す遺児が存在した。震災や死別の体験が遺児自身にとって重要なもの、または人生にとって意味のある体験として捉えるようになった遺児達もお

り、成長する過程で死別、震災体験を深めている様子がうかがえた。そこでは自分自身の震災体験を自分自身のものとして「主体化」

(倉西 2010) させていることが大きな役割を果たしていることが考えられた。

しかしこれによって震災を肯定するということに至るわけではない。両価的な体験はあくまでも両方存在しているということであり、震災遺児はまだこれからも震災体験と対峙し続けていくことが考えられるのである。

②「震災遺児」というアイデンティティとその揺らぎ

幼少期に被災したため震災の記憶が少ない遺児や震災の「関連死」という分類にされている遺児にとって、自分自身が「震災遺児」と呼ばれることへの違和感や迷いをもちながらこれまで生きてきた。震災というものを自分自身の中でどのように位置づけていくかは、自分自身が震災の影響をどのように収めていくのかに大きな影響を与える。さらに思春期・青年期の震災遺児にとっては自分自身のアイデンティティをいかに確立していくかに極めて重要な課題になっていることがわかる。そしてこれは、震災や死別体験が自身の「存在」に向き合う入り口となっているとも言え、震災や死別体験に取り組むということは個を深めていくことにも繋がっていることが考えられた。

③伝える責務とメディアへの感情

大震災は遺児自身の個人的体験だけでなく、阪神地方や日本全体として体験しているものでもあった。それゆえ、自分だけのためではなく多くの人のために震災体験を伝えていかなければいけないという「責務」のような思いを持っている遺児がいた。しかし同時に自身の意思とは異なってメディアに取材された幼少期の体験や、自らの意思で取材などを受けても、取材側の心無い言葉に傷つきや怒りを体験した遺児もいた。それでもその責務を持っている遺児たちの姿は、世の中から忘れら

れないように、多くの亡くなっていった方々への「供養」の営みであるようにも感じさせられた。

④あしなが育英会・レインボーハウスの存在
震災遺児同士の交流が震災遺児の支えとなり、遺児の成長の一助になったことが多く見られた。震災遺児同士が集まる場は唯一無二の場所であり、学校などの友人とは一線を隠し、他者との違いを感じやすい遺児が持つ孤独感を和らげ生きることを支えることになっていた。さらに自分自身を支えかつモデルとして他の遺児の姿に触れ、そこから気づきや学びを得て成長につなげていた。震災遺児が震災や死別体験から肯定的側面を見出すことができたことはこの援助があったからこそだと言えることができ、適切な援助の有無によって遺児のその後の人生は大きく変わってしまうだろう。

⑤年月の経過に伴う問題の変化

震災遺児の平均年齢は 23.7 歳で 65.9%が 20 歳以上となっており協力者の半数以上の遺児は 16 年を経たことで成人している遺児の方が多くなっている。成長の中で自分自身の震災体験や死別体験が未だに変化続けていることが見出されており、長期的なサポートの存在が必要であることが考えられる。さらに年月の積み重ねによって結婚・子育て等の課題にも直面するようになってきている。A さんは自身の母親モデルの不在、結婚や子育てを支えてくれる存在の欠落に直面し、喪った母への希求が高まるということが見られた。これは実際に母親となっている D さんにも見られていたものであり、それぞれのライフサイクルの変化に伴って援助内容を変化させる必要がある。

【おわりに】

阪神淡路大震災から 16 年を経ても様々な形でその影響が残っていることが見出された。それらはマイナスな影響だけでなく、プラスの影響となる場合もあった。ただ、そこには

援助を受けてきたからこそ、そう捉えることができるようになってきていることも考えられ、援助を受けてきていない遺児との比較なども必要になってくると思われる。

最後に、誤解の無いよう述べておきたいが、本研究は東日本大震災が起こる以前より研究計画を行い、東日本大震災が起こった3月11日以前にはほぼ調査が終了していた。倫理的な観点から触れておくが、本研究は東日本大震災が起こったために行うことになった研究ではないということである。

ただ、本研究が東日本大震災遺児・津波遺児への理解とその援助に寄与するものとなることを願っている。2011年3月11日に発生した東日本大震災では、2011年6月現在で1400人以上の震災・津波遺児がいることがあしなが育英会によって把握されている。今後数十年に及ぶ援助の必要性が考えられるが、本研究がその一助になればと思う。

【文献】

Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Kishimoto, J., Miyake, Y., Nishizono-Maher, A.: Reliability and validity of Japanese-language version of the Impact of Event Scale-Revised (IES-R): four study on different traumatic event, *The journal of Nervous and Mental Disease* 190;175-182, 2002

Horowitz, M. J., Wilner, N., Alvarez, W: Impact of Event Scale: A measure of subjective stress, *Psychosomatic medicine*, 41, 209-218, 1979

兵庫県長寿社会研究機構心のケア研究所：PTSD 遷延化に関する調査研究報告書—阪神・淡路大震災の長期的影響—, 2001

兵庫県・神戸市：阪神淡路大震災震災遺児実態調査報告書参考資料 2, 2011

倉西宏：遺児における親との死別体験の位置づけとその変化 —修正版グラウンデッド・セオリーアプローチを用いて—死の臨

床 33(1), 69-75, 2010

宮井宏之・内海千種・大和田攝子・加藤寛：がんによる死別が遺族に与える心理的影響の評価 心的トラウマ研究 6, 1-10, 2010

宮井宏之・内海千種・大和田攝子・加藤寛：阪神・淡路大震災 15 年後における遺族の精神健康について 心的トラウマ研究 6 53-62, 2010

Weiss, D. S., & Marmar, C. R., : The Impact of Event Scale-Revised. In: Wikson, J. P., Keane, T. M(eds), *Assessing Psychological trauma and PTSD*, The Guilford Press, Newyork, 399-411, 1997

八木俊介、倉西宏：阪神・淡路大震災 12 年後における震災遺児とその養育者への「改定出来事インパクト尺度 (Impact of Event Scale-Revised: IES-R)」調査報告 第 9 回日本トラウマティックストレス学会抄録集, pp99 2010

研 究 助 成

社会学・社会福祉学的研究

